

人との出会いが活躍の場を広げる

木下大輔

台湾國立中央大學天文研究所助理教授

天文学に興味をもったときや台湾で研究することになったとき、重要な場面では常に人との出会いがあった。木下さんの天文学に対する熱意が、人を引き寄せるのだろう。その出会いの先に、宇宙の神秘との出会いが待ち受けているに違いない。

天文学の虜となる

学部生時代は東北大学で物理学を学んでいました。ところが、学部2年のとき、偶然にも天文学と出会うことになりました。国立天文台で観測データの画像解析の協力者を募集していることを知ったのです。そのとき私は、「計算機を使ってデータを処理し、意味のある結果を導くことができるなんて面白そうだ」と思いました。

天文学者への第一歩となるチャンスはすぐ訪れました。百武彗星の出現です。そのときお世話になったのが、自然科学研究機構国立天文台の渡部潤一准教授（現在は天文情報公開センター長）です。こ

のときのことはよく覚えています。彗星が最接近した1996年3月25日。山梨県まで出かけて、CCDカメラを使って彗星の尾の部分撮影しました。翌4月、仙台に戻ってすぐに、当時、天文学科長だった土佐 誠・東北大学大学院天文学専攻教授を訪ねました。土佐さんは他学科の飛び込みの学生の相談に快く応じてくださり、私は撮影した画像の解析を行うことができました。その結果、彗星の尾がちぎれて離れていく現象をとらえていることがわかったのです。

早速このことを渡部さんに報告すると、「これは面白いから論文を出しなさい」ということになりました。そして、日本天文学会欧文研究報告（PASJ）に

論文を投稿することができたのですが、じつは論文を書いたのは、ほとんど渡部さんだったのです。しかし筆頭著者には自分の名前が。渡部さんは「これは君がやったんだらう？」とおっしゃったのですが……。いろいろな意味で思い出に残る研究論文でした。

研究の舞台は台湾へ

その後も太陽系の小惑星や彗星といった小天体の観測研究を続けていたのですが、次の転機は総研大の博士課程の学生として国立天文台で研究を始めた年に訪れました。2001年1月、国際天文学連合（IAU）の研究会に出席したとき、はじめて台湾を訪れたのです。

台湾では近年、科学研究が盛んになってきています。「中央研究院」という機関があり、毎年多くの研究者を雇い入れています。日本人も10人くらいいます。大学はそれに比べて規模が小さいですが、たとえば私が現在所属している台湾國立中央大學には、天文の研究者が6人います。

そのIAU研究会で、太陽系の小天体を専門とする中央大學の葉 永烜（Ip Wing-Huen、現副学長）教授と出会いました。葉教授とはIAU研究会だけでなく、そのあと中央大學でも交流をもつことができました。それがきっかけで、日本学術振興会特別研究員のときに中央大學で研究する機会を得ました。

このような縁があって、2004年に中央大學天文研究所の教員にならないかという話があったのです。「日本では天文学で職を得るのは簡単ではない。これを断る理由はない」と考えたのですが、特別研究員の任期がまだ残っていたため、任期満了にあわせてオファーを受けました。そして2006年2月、新学期が始まる時期にあわせて中央大學に着任したのです。

台湾での日常

台湾に来ておよそ2年が経ち、日々の生活にも慣れてきました。中央大學では引き続き太陽系小天体について研究し、また助理教授（日本でいう助教）として大学院と学部の講義を担当しています。このうち大学院は英語が通じるのですが、学部の講義では中国語を使わなければならないので大変です。

もちろん、行く前に中国語（北京語）は勉強しました。しかし、それはほとんど役に立たず、台湾に来て、中央大學の中国語の授業を受けたことが大きな助けになりました。授業は週2回の各3時間、毎回宿題が出るハードな内容です。宿題は、故郷のことや週末のことなどありふれたテーマを1枚にまとめ、それを受講生どうしで発表して質問しあうのです。そうしてある程度話せるようになると、学生が話しかけてくれるようになるの

木下大輔（きのただいすけ）
1974年、東京生まれ。年に4回は
鹿林天文台に登り、そのたびに山
頂までの最後の約600mを20分間
ほどかけて歩く。2m望遠鏡建設
計画の副代表も務める。



で、だんだん上達していきました。いまは、日常生活はこなせるくらいになっています。

住まいは大学内の教員用宿舎ですが、一人暮らしには十分な環境です。食事にも苦勞していません。学食に「自助餐」というメニューがあり、これは1枚の皿にいろいろなものが盛り付けてあるものですが、なかなかの味で、しかも200円と安い。もちろん、近くの街まで食事に出かけることも、足を延ばして隣の台北に行くこともあります。

研究する環境は、日本とほとんど変わりません。ただ、日本の国立天文台にいたときは周りにたくさんの研究者がいて、違う分野の人との交流もしやすかったのですが、台湾ではそうはいきません。ちょっとした質問ならメールでなんとかになりますが、じっくり相談したいときなどは困ります。

世界をまたにかける

私の研究に対するモチベーションは「太陽系をもっとよく知りたい」です。

近年、太陽系以外にもたくさんの惑星系が発見され、人々の興味はこれら系外惑星に向けられるようになってきました。しかし、われわれは太陽系のことをすべて知っているわけではありません。だからまず、太陽系を詳しく調べるのが重要だと考えたのです。

現在は、Pan-STARRS計画に関わっています。これは台湾、アメリカ、イギリス、ドイツの研究機関が協力し、動く天体、明るさが変わる天体をすべて観測しようという壮大な計画です。この計画で、太陽系や、もちろんそれ以外の天体についてどれだけのことが解明されるのか、これからが楽しみです。

日本との協力は常に考えています。しかし、協力が目的であってはならないと思います。たとえば、台湾で観測して日本が理論的研究を担当するかたちの共同研究をしたことがあります。それぞれの得意分野を持ち寄り、国境をとくに意識することなく自然に協力関係を築いていければいいと思います。

（取材・構成 吉戸智明）

國立中央大學天文研究所の鹿林（Lulin）天文台は台湾中央部、標高2862mの地点にある。この一帯は国立公園の指定を受けているため、自動車を通れる道は途中までしかない。現在、2m望遠鏡を建設中である。



大学のゼミで指導にあたる木下さん（左端）。

